燦爛と波荒るゝなり浮寐鳥

鑑賞・解説

昭和3年2月 「天の川」巻頭の句です。

この句は仙台から帰郷後の作といえますが、句の結構から見て起縁は別として在仙台時、周遊した中禅寺湖あたりの印象のように思えます。句意は、冬晴れのもとやや風が強く波立って水面は光か爛いている、日当り良い入江めいた水面に風をさけて集まった鴨や雁などが嘴を翼の下に差入れてあたかも揺り籠に揺られるような心地よい寐をむさぼっているといった情景が極めて印象的で明るく純粋な抒情の世界が展開されていましょう。鴨や雁などは冬の渡り鳥（候鳥）で北方地域が結氷期になると日本などの温暖な地域を求めて渡来し、秋から冬を越して春の解氷期を迎えて北方に帰ります。浮寐鳥は、それら渡り鳥が水に浮かんだまま寝る姿をいい冬の季語に属します。渡り鳥の起源は定かではないようですが、人間始め総ての生き物は自然という広大無辺な恩恵に浴し、それぞれ習性を持って生命を伝承して来たことは事実です。自然を信じ切って無心に眠っている浮寐鳥の純粋な姿は、又、不器男の自然の深奥に触れた目や心の姿でもあるかと思えます。

参考文献:「不器男の一句」（松野町教育委員会発行）

寒鴉己が影の上におりたちぬ

鑑賞・解説

昭和2年 12 月 「天の川」掲載の句です。

鴉は大がらすといわれるようですが、ここでは普通見かけるものと思ってよいでしょう。吉凶、明暗、親疎など二面想を持つ鳥で、遠くに置くと、例えば、夕焼の空をねぐら入りする姿は鳴

声と共に童謡・民謡などで古くから親しまれてきましたが、近くに引寄せると、姿態、習性、仕草など好感が持てず、殊にだみ声で鳴き続ける様は凶を呼ぶとして疎まれるものでしょう。この句の場合距離はあまり無いようです。而も稍伏目に捕えているところから、対象が大変克明に目に映ります。川堤から中川原あたりを見たものと受け取れます。寒晴れの緊迫した空間を大きく翼を拡げ影を曳いての滑空、稍翼を立てたかと思う瞬間大地を打って己が影の上に降り立ったと云う句意。鴉の実体も影も真黒。磧であれば黒白の対照も格別。束の間の動きの中に複雑な感懐が秘められ一種異様なものが身内を走る思いがして鳴なりません。絶対的な対象の捕え方、鋭い感覚で見事に実現化しているといえましょう。

参考文献:「不器男の一句」(松野町教育委員会発行)

茶の花や畚の乳子に月あかり

鑑賞・解説

昭和3年1月 「天の川」掲載の句です。

この句で目に触れるものは、茶の花、畚の乳子とそれを照らす月あかりですが、茶の花から山裾の畑が、畚の乳子からその畑で農作業に励んでいる若い農夫婦が連想されましょう。これらを事象として展開して見ますと、山峡の日暮は早くいつか初冬の澄んだ月明りに茶の花畚の乳子がほのかに浮かぶ、一方農作業(藷掘りでもありましょうか)の夫婦は夕冷えの中の乳子に気を配りながら仕舞仕事に専念する、それら全体を包んで夕闇が次第に濃くなって来ると云ったものになりましょうか。茶の木は晩秋から初冬にかけて素朴可憐な花をつけ、活花の根締や茶室などでも親しまれる花、畚は云うまでも無く作物などを運ぶ農具の一種、乳呑子を伴って野良に出る当時の厳しい農村生活が余韻として伝わって参りましょう。不器男

の感性で捕えた対象は常に清冽で明るく暗さはありません。又、捕え方の独創性と表現の的確さで、この一句も何か茶の花が全体の根締となってぴたりと決まっているように思えます。

参考文献:「不器男の一句」(松野町教育委員会発行)

あちこちの祠まつりや露の秋

鑑賞・解説

昭和2年1月 「天の川」巻頭の句です。

昔は産土神(氏神)とは別に、専従の称宜も無く日頃の参拝者も無い大小数カ所の祠神が、里山や丘の端に散在していました。定められた期日(主として秋)には夫々由縁の人たちによって、初穂や新鮮な果実野菜などを供え小さな幟を立ててお祭りする程度、この風習は全国的のようです。この句は昭和2年1月号、天の川、ホトトギス両誌の掲句で在仙台として投句しています。情景にこだわることも無いのですが視界の拡がり、関連投句から見て東北地方の素朴な山村での属目吟かと思います。ご承知のとおり露は夏から秋にかけて夜間気温低下により空気中の水分が草原や岩石の上に凝結したもの、露の降りた日は天気がよいと言われる通りこの日も快適な秋晴れで未だ緑を保った山野の空間に散見する祭幡の白が極めて印象的、又、露の爽涼感を通して秋と云う季感が存分に盛られています。昭和2年といえば不器男は大学を捨てて帰郷し専ら句三昧の日々を送っていた時期でした。この句を味わうほどに彼の温顔慈眼の奥にひそむ清冽な気息が強く感じられてなりません。

参考文献:「不器男の一句」(松野町教育委員会発行)

沈む日のたまゆら青し落穂狩

鑑賞・解説

昭和2年 10 月 「天の川」巻頭の句です。

この句を読むと直ぐにフランスの画家ミレー（バルビゾン派の代表者　1814～75）の名画「落穂拾い」が連想されてなりません。勿論内容も感動の焦点も違いますがそれに匹敵する名作と信じています。この句の焦点は何といっても沈む日の寸刻を「青し」と捕らえた鋭い感覚にありましょう。又、落ちる、入るではなく沈む日としたことによってゆるやかな時の流れを表出していることにも注目すべきでしょう。そして落穂拾いを配して不器男独特の手法で時間と空間を調和させていることでしょう。この調和によって感覚が抒情の中に融け気負いの無いスケールの大きなそして完成度の高い作品になっていると思います。

参考文献:「不器男の一句」（松野町教育委員会発行）

ふるさとを去ぬ日来向ふ芙蓉かな

鑑賞・解説

大正 15 年 10 月 「天の川」巻頭の句です。

この句は東北大在籍中（大正 15 年）夏休いで帰省した折の作です。本人にとって夏休みは明るく和やかな家庭に溶け入って自由を満喫出来る機会だったと思えます。午近く起床するのが通例、日中は決まって 4、5 人の学童を率いて川泳ぎ、仲間を得てテニスを楽しむ、夜は深夜まで読書、句作等、更に週 1 階句座を設けるといった日程だったようで日々心満たされるものだったに違いありません。しかし、休暇もあとわずかとなり、前述日常との決別の日が迫るにつれ、言葉に尽くせない寂しさ、心の揺れの募ってきたことも想像されます。そうした折り、

目に触れ心にとめたのが芙蓉、初秋から中秋にかけて淡紅色の色をつけ、女性的で気負いのない気品と風韻を備え接して親しみと安らぎを覚える情趣、それに自らの感動と季感が混然と溶け合って華麗で格調の高い前掲の句に凝縮しているといえるでしょう。

参考文献:「不器男の一句」(松野町教育委員会発行)

向日葵の蕊を見るとき海消えし

鑑賞・解説

大正 15 年8月 「天の川」巻頭の句です。

向日葵と云えば夏を象徴する花の一つ、径2，30cm に及ぶ鮮黄多弁の大輪、心部の管状花(蕊に当たる)は紫褐色の厚みのある複合体、茎は数 m にも及び極めて強靭で直立し、尖端に大輪横向の一花を持つたたずまいは真に雄勁、而も烈日に輝く紺青の海を背景としたこの句、構図的にも色調の面でも力強い洋画的印象を受けましょう。この句の真価は視点の移動と云う新しい試みにあります。「海消えし」の過去形表現は更に感動を強調し、海は勿論一切を消して蕊一点に凝縮し、その一粒一粒が克明に読者の視覚に食入ることでしょう。

参考文献:「不器男の一句」(松野町教育委員会発行)

風鈴の空は荒星ばかりかな

鑑賞・解説

大正 15 年 10 月 「天の川」 巻頭の句です。

不器男は大正 15 年7月に東北大の学友と日光中禅寺湖、戦場ヶ原、鬼怒川温泉などを旅行しました。この句はそのときの高原の旅宿で出会った一句と思われます。騒音も飛塵もなく澄み切った空に散らばった星の光は青く荒々しく、又、天空自体が落ちてきそうなほど目近かに迫る荒星の空。高原か深谷か、旅宿の窓に吊られた風鈴の澄んだ音色が荒星の空へと溶け入り、又、不器男の旅情感懐にも浸みたことでしょう。

参考文献:「不器男の一句」(松野町教育委員会発行)

うちまもる母のまろ寝や法師蝉

鑑賞・解説

大正 15 年 11 月「天の川」巻頭、同 12 月「ホトトギス」掲載の句です。季語は「法師蝉」で秋。

まろ寝とは寝巻に着替えることなくしばらく横になること、うたた寝のことです。

夏の間の疲れが出たのか、母親が畳の上に横になっています。夏休みに帰省していた日々の一句でしょうか。

不器男は6歳の頃に父を亡くしています。その後は、長男悌吉の力を得て母キチが不器男たちを育ててくれました。不器男は末っ子で特に可愛がられたことでしょう。『好きなように向いていけ』と自主性を重んじ、気丈に自分たちを育ててくれた母も年を取ったのだと感じます。「ジーーー」と鳴き終わる法師蝉の声がその寂しさをより深いものにし、親孝行の気持ち、感謝やいたわりの感情など母に対する愛情を思い起こさせます。

参考文献:不器男の一句(松野町教育委員会発行)

さきだてる鶯鳥（がちょう）踏まじと帰省かな

鑑賞・解説

昭和3年7月「天の川」巻頭、「ホトトギス」掲載の句です。「帰省」は夏の季語。

不器男が帰省した時のことを詠んだ句でしょうか。

長い道のりを旅しやっと故郷の町へ、そして我が家が見えてきました。思わずほっとします。早く家に入り、懐かしい家族の顔を見てひと息つきたいところ。すると門を入ったところで鶯鳥が近づいてきました。急げば鶯鳥を踏みつけてしまいそうです。この句にはそんな感情が行き交う様子がみえます。

鶯鳥は家禽として古い歴史を持ち、童話や昔話にもよく登場します。ここでは不器男の帰省を歓迎するように足元にまとわりつく姿があたたかく愛らしく描かれています。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

にごり江を鎖す水泡や雲の蜂

鑑賞・解説

昭和 2 年 7 月の家族句会での句です。「雲の峰」は夏の季語。

夏になると子ども達を連れて川遊びをしていたという不器男。この句もその中で出来た句かもしれません。

にごり江は濁った入江や川のこと、雲の蜂とは激しい日射による上昇気流で出来る積乱雲のこと。むくむくと湧きあがり、時には成層圏にまで達することもある大きな雲です。また、雷を

伴い、夕立を伴うこともあるので雷雲、夕立雲ともいわれます。対して、水泡ははかないもの、わびしいものの象徴。

内部に大きなエネルギーを蓄えた力強い雲と出来ては消えるはかない水泡、夏という季節の持つ対照的な情景が 1 句に詠まれています。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

飼屋の灯母屋の闇と更けゆきぬ

鑑賞・解説

昭和 3 年 6 月「破魔弓」巻頭の句です。「飼屋」とは蚕を飼うための小屋のことで春の季語。

今ではほとんど見られなくなりましたが、明治から大正にかけて、蚕（かいこ）を飼ってその繭から生糸を作る産業は日本の輸出産業の一つでした。

芝家は当時養蚕業を営んでおり、広い屋敷の敷地内に飼屋があって何人もの使用人がいたようです。繁忙期になると一晩中飼屋の窓に灯りが点き、作業する人々が忙しく働いています。それとは対照的に家人の住む母屋は明かりが消えて真っ暗で深い闇の中。

光と闇、明と暗の対比を包みこんで夜が更けてゆきます。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

中二階くだりて炊ぐ遍路かな

鑑賞・解説

昭和3年5月「天の川」掲載の句です。「遍路」は春の季語です。

当時は暖かくなると、白衣・菅笠（すげがさ）・金剛杖などを身にまとったお遍路さんを多く見かけました。お遍路は四国各所にある 88 か所の札所を数 10 日かけて歩きます。行程は約 1,200km あり徒歩で約 40 日かかる道のりです。

そうしたお遍路を泊める宿を遍路宿といい木賃宿で、薪を提供し時には鍋などの調理器具を貸し出して宿泊代を決めていたようです。

この句は、あるお遍路が宿の中 2 階の部屋から階段を下り、炊事場で食事の支度をする様子を詠んでいます。「くだりて炊ぐ」の中七音に一連の動作がよく表れています。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

鞦韆（ふらここ）の月に散じぬ同窓会

鑑賞・解説

昭和3年5月「天の川」掲載の句です。鞦韆（しゅうせん）とはブランコのことで春の季語です。不器男は「ふらここ」と読んでいたようです。

同窓会は現代でも行われていますが、この時代はもっと質素で簡単なものでした。学校などの部屋を借り、地元の魚屋などから数鉢の仕出しを頼んでいたようです。不器男も母校での同窓会に参加し懐かしい話に花を咲かせたのでしょうか。楽しい時間もやがて終り散会となり

ました。外に出ると春の夜空に月が昇っています。そしてその柔らかな光を浴びたブランコ。旧友たちと楽しい時を過ごし、満足して帰路に就く不器男の心情が感じられます。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

さゝがにの壁に凝る夜や弥生蓋

鑑賞・解説

大正 15 年 6 月「天の川」巻頭の句です。「ささがに」とは蜘蛛のことです。「弥生蓋」とは「弥生尽」つまり春の尽きる（終わる）頃のことを差します。春は植物が芽吹き、動物たちも動き出す明るい雰囲気もありますが、反面その終わりには物寂しさを感じます。

この句は春の終わりの夜、壁に蜘蛛が取りついている様子を詠んだ句です。手足の長い蜘蛛が壁にじっと張り付いている様は一種不気味ではありますが、それがかえって晩春の物寂しさと行く春を惜しむ心情に通じています。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

凩や倒れざまにも三つ星座

鑑賞・解説

昭和2年1月「天の川」巻頭の句です。 三つ星座とはオリオン座のこと。オリオン座を構成する星は大きく明るい星が多いため夜空でも比較的見つけやすく特に有名な星座です。「オリオン座」では見えない星が「三つ星座」とすることで一つ一つ鮮明に浮かび上がります。「倒れざまにも」が凩の強さをより強調し、冬の夜の寂寥感、不安感を感じさせます。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

雪融くる苔ぞ楛ぞ山始　（ゆきとくるこけぞしもとぞやまはじめ）

鑑賞・解説

昭和 3 年 2 月「天の川」巻頭の句です。「山始（やまはじめ）」とは新年最初に山仕事を始めることをいいます。お酒やお米、餅などのお供え物を供え、1 年間の作業の無事を祈ります。時期や方法に若干の違いはありますが全国的に昔から行われてきた習わしのようです。「楛（しもと）とは木の枝や幹から伸びた細い枝、差し交わした小枝のことを指します。

降り積もった雪が融け、楛を伝い流れている様子が浮かび上がります。薪を作るための山仕事でしょうか。「苔ぞ楛ぞ」リズムよくたたみかけることで、山仕事に向かう人々の意気込みが伝わってきます。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

大年やおのづからなる梁響

鑑賞・解説

昭和 2 年 3 月「天の川」巻頭の 1 句です。「大年」とは「大晦日」のこと。1 年の汚れを払い、新年を迎える準備に家中が忙しい 1 日です。

夜になり昼間の忙しさも一段落した頃、不器男生家の天井にどっしりと横たわる巨大な梁が突然めりっという音をたてて鳴ります。不器男は自室で読書中でしょうか。

大晦日という特殊な時の移り変わりの中で、しんと静まり返った空間に梁の鳴る音をとらえた1句です。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

柿もぐや殊にもろ手の山落暉（やまらっき）

鑑賞・解説

大正 15 年 1 月「天の川」巻頭の句です。「落暉（らっき）」とは落日のこと。「もろ手」とは両方の手。山峡の夕日に照らされた柿を両手でもぐ様子が浮かびます。柿をもいでいるのは女性でしょうか。バックには秋の真っ赤な夕日が沈んでいきます。

夕日に映える柿の実とそこに添えられた白く柔らかい両腕に焦点を当てて独特の雰囲気を醸し出しています。また、「夕日」とせず「落暉」としたことで光彩がより鮮やかに感じられます。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

川蟹の白きむくろや秋磧

鑑賞・解説

大正 15 年 10 月「天の川」巻頭の句です。松野町には清流四万十川の支流である広見川（ひろみがわ）が町内を大きく蛇行して流れています。川にはこの句にでてくる川蟹も多く生息しています。川蟹は昼間は草や石の陰に潜み夜になると活動を開始します。

秋が深まると水位が下がり、川の瀬に石磧が広がったのでしょう。磧を歩いていると、水にさらされ風にさらされ、日に焼かれて色褪せた川蟹の死骸が目に留まった、そんな様子を詠んだ句です。

蟹のむくろがある磧の石も水分がなく乾いています。また、秋が深まるにつれ気温が下がるだけでなく、日が短くなり空気も澄んで乾いてきます。そういった季節感と死骸となって磧に転がっている川蟹とが重なり、むなしさ、わびしさを感じさせます。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

蝉時雨つくつく法師聞こえそめぬ

鑑賞・解説

昭和４年 10 月「天の川」巻頭の句です。不器男は同年９月には九州帝大附属病院に入院しており、この句は在郷最後のもので病床で詠んだものと思われます。

蝉時雨とは、多くの蝉が一斉に鳴く様子を時雨の降る音に見立てた言葉。中でもツクツクボウシは他の蝉に比べて特徴的な鳴き方をするため、蝉が少なくなる晩夏になると鳴き声が目立って聞こえます。

暑いさなかには耳障りにもとれる蝉の鳴き声ですが、この時の不器男は病床で毎日耳にしている蝉時雨のなかにツクツクボウシの声があることを聞き分けたのでしょう。盛夏から晩夏へ季節の移り変わりとともに自らの病状の回復を願ったのかもしれません。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

月雲をいづれば燃ゆる蚊遣（かやり）かな

鑑賞・解説

昭和 2 年 10 月「天の川」巻頭の句です。夏、暑さのほかに私たちを悩ませる存在といえば「蚊」ではないでしょうか。現在では蚊取線香や電気蚊取器が普及していますが不器男の生きた時代には蚊遣（かやり）が活躍していました。蚊遣とは、蚊やブヨなどの害虫を追い払うための道具で火鉢などに、半乾きの草（ヨモギ等）を乗せます。出てきた煙で害虫を追い払うのです。蚊帳とともに昔ながらの夏の実用的風物詩といえるでしょう。

この句で不器男は蚊遣を月雲と取り合わせています。夜空を眺めていると、雲に隠れていた月が顔を出した、ふと蚊遣りに目を移すと煙の底から炎となって燃え始めた、あたかも月が誘いだしたように感じられたというのです。月雲と蚊遣、自然と生活の取り合わせに不器男の感性を感じます。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）

澤の邊に童と居りて蜘蛛合（くもあわせ）

鑑賞・解説

昭和 2 年 8 月「天の川」掲載の句です。不器男は子どもと遊ぶことが好きでした。姪と実家近くの河後森城跡に登ったり、近所の子どもたちを連れて水泳や登山を楽しんだエピソードが残っています。この句もそういった日々の一場面を詠んだものでしょう。つかまえてきた蜘蛛を木の枝の端と端にとまらせ、中央に追いやります。2 匹の蜘蛛は長い手足で探り合いながら取っ組み合って戦いどちらかが糸を伝って棒から垂れ下がったり、相手の糸に巻き込まれると勝敗が決まります。

　不器男も子どもたちと一緒に蜘蛛合わせを楽しんだのでしょうか。彼らを見る不器男の温かいまなざしを感じる一句です。

参考文献：不器男の一句（松野町教育委員会発行）